

アメリカ合衆国における 外国人労働者問題の研究動向

日本の研究を中心に

庄司 啓一

- 1 はじめに アメリカ合衆国における外国人労働者問題とは
- 2 新しい社会史と移民史
- 3 世紀転換期のヨーロッパ系移民
- 4 在米日本人・日系人移民
- 5 メキシコ系アメリカ人
- 6 おわりに

1 はじめに アメリカ合衆国における外国人労働者問題とは

日本におけるアメリカ外国人労働者についてのサーベイを依頼されたとき、アメリカ合衆国における外国人労働者問題の研究とはどのようなものだろうか。それが筆者の最初の率直な疑問であった。ヨーロッパの場合、国家とはほぼ同一の民族を前提とする国民国家であるのに対して、アメリカ合衆国は、世界各地から外国人を移民として受け入れてきた移民国家であり、国民と外国人という境界の関係はヨーロッパ諸国のそれと性格的に異なるのではないか⁽¹⁾、という問題意識であった。第二次大戦後の西ドイツ、フランスにかつての植民地から大量の外国人労働者が導入され、後に外国人労働者問題が発生した。今日でも、3500万人の外国生れが居住するアメリカ合衆国にはヨーロッパ諸国のような外国人労働者問題がそもそも存在するのだろうか。

いうまでもなく、アメリカ合衆国は移民の国と呼ばれるように、先住民であるいわゆるインディアンを除いて、15世紀以来、世界各地の移民から構成され、多民族が統合された国民国家である。その国で「外国から入ってくる移民」という観念が成立するのは独立革命以後であり、移民についての統計が取られ始めたのは1820年である。それまでは、ヨーロッパからの植民者（colonials）として、あるいは入植者（settlers）として理解され、独立以降の移民（immigrants）とは区別されてきた。また、建国以来、合衆国は北アメリカ大陸における領土を膨張させながら、ヨーロッパ大陸から多様な移民を受け入れ、彼らの帰化・国籍取得を促し、国民として積極的に取り込んでき

(1) 古矢旬の指摘は重要である。「『移民国家』は、国民国家としてのアメリカ合衆国の特殊性をもっともよくしめすメタファーである。それは合衆国が、国民、国土、主権のいずれについても、ヨーロッパ型の国民国家とは異質な面をふくむことを象徴的に表現している。」『アメリカニズム』東京大学出版会、2002年、p. 89。

た。その基本政策は建国からほぼ一世紀の間は揺ぎ無かった。

アメリカ合衆国は、連邦政府の移民・帰化法とは別に、州レベル独自の移民・帰化法があった。しかし、アメリカ合衆国はすべての外国人を国民として受け入れたわけではない。黒人は1868年憲法修正14条により国民となったが、1882年、カリフォルニア州では中国人が排斥の対象となり、連邦法として中国人移民排斥法が制定され、中国人は「帰化不能外国人」として国民の境界外へ追い出された⁽²⁾。そして、19世紀の末から20世紀の初頭にかけて、移民労働者・外国人労働者が連邦レベルではじめて社会的・政治的・経済的に問題となった。19世紀末には、「アメリカ社会秩序全体に対し移民が脅威」⁽³⁾と認識されるようになり、全国的に外国人が排斥の対象となり、20世紀に入ると国家は世界各地からの移民に対して、一連の移民制限法を制定すると同時に、国家としての国民の境界と新しい社会秩序を構築したのである。とりわけ、1924年移民法は、国別移民の割当制をとり南東ヨーロッパからの移民を大幅に規制したばかりでなく、アジアからの移民を、植民地のフィリピンを除き、「帰化不能外国人」として禁止した。しかし、アメリカ大陸諸国からの移民は規制から除外された。

それから数十年間、国民的コンセンサスが支配し、移民の数は減少し、移民問題は解決したかのようであった。だが、公民権運動の成果として1965年の移民法は、西ヨーロッパを優先する国別割当制を廃止し、世界各地から平等を原則として移民を受け入れた。移民の年間受け入れ上限を東半球から17万人、西半球から12万人と設定したが、大方の予想に反して、移民総数が急増したばかりでなく、移民の主流はかつてのヨーロッパから、アジア、ラテンアメリカへシフトした。また、76年にはラテンアメリカからの移民の上限を年間2万人にしたために、その改正が大量の不法移民流入の契機となり、70年代の後半となると、不法・非合法移民の急増が政治的な問題となった。それから10年間の連邦議会での激しい議論を経て、1986年「移民改革管理法」が制定され、300万人近い非合法移民が恩赦により合法化された。だが、その恩赦の対象者の約90%がラテンアメリカからの移民であった⁽⁴⁾。

このような移民の流れの大きな質的变化により、90年代には移民問題が再び脚光を浴び、政治問題化した。ジョージ・サンチェスは、92年のロサンゼルス暴動、その後の不法移民への福祉・教育サービスなどの停止を主張する移民排斥運動の高まりを新しいネイティヴィズム、「移民問題の人種化」⁽⁵⁾と表現する。つまり、アメリカ合衆国における移民・外国人問題は今日においても、国民

(2) 中国人排斥運動については、油井大三郎「19世紀後半のサンフランシスコ社会と中国人排斥運動」油井他編『世紀転換期の世界』未来社、1989年、国民と外国人の境界の設定の視点から、中国人排斥を論じたのが貴堂嘉之「帰化不能外国人の創造 1882年排華移民法制定過程」『アメリカ研究』29、1995年。

(3) John Higham, *Send These to Me: Immigrants in Urban America*, 1975, 邦訳 ジョン・ハイアム, 斎藤真ほか訳, 『自由の女神のもとへ』平凡社, 1994年, p. 28.

(4) 1986年移民改革管理法については、庄司啓一「リストラクチャリングとヒスパニック」有賀貞編『エスニック状況の現在』日本国際問題研究所, 1995年。

(5) George Sanchez, "Face the Nation: Race, Immigration, and the Rise of Nativism in Late Twentieth Century America" *International Migration Review*, 31-4, 1997, 邦訳 村田勝幸「ネイションの相貌 人種, 移民, 20世紀末アメリカにおけるネイティヴィズムの台頭」『思想』931, 2001年。

の境界と社会的秩序の構築と密接に絡み合っている問題なのである。

2 新しい社会史と移民史

アメリカ合衆国における旧移民史学の最高峰と言われたオスカー・ハンドリン『根こそぎにされた人々』⁽⁶⁾に書かれた移民像とは、国民国家形成期のヨーロッパ各国から多様な文化・慣習をもった貧農が合衆国において、一人で孤独や疎外感に苛まれながらも、アメリカ的価値観と生活様式を受け入れるという同化論⁽⁷⁾に依拠していた。同時に、移民研究は移民の到着した時点から開始されるものであり、移民の出身国の研究は国民国家を前提としたため、出移民は故国を棄てたものとして考察の対象とされなかった⁽⁸⁾。

このように、旧移民史学が移民の同化過程に焦点を当てたのに対して、新しい移民史研究は移民の伝統・慣習が長期的に存続し、自らエスニック・コミュニティを形成したばかりでなく、能動的にアメリカ社会へ働きかけた主体的存在であったことを明らかにした。また、エスニシティが本質的意味をもつ恒久的な構成要素であることを主張し、そのような研究は「新しい移民史学」としての潮流を形成していった⁽⁹⁾。

ハンドリンの著作からほぼ35年後の1985年、ジョン・ボドナーは、19世紀末から20世紀初頭にかけての都市におけるヨーロッパから移民の生活を実証的に調査した『移住させられた者 都市的アメリカにおける移民の歴史』⁽¹⁰⁾を出版した。そこでボドナーは、ガットマンなどのように、工業化への抵抗の基盤としてエスニック・コミュニティを捉えるばかりではなく、移民集団の自律的で現実的な対応という視点から多角的なエスニック・コミュニティとして捉え、その中に少数の中産階級の上昇志向の強い人々と、労働者階級との異なった二つの集団の日常的文化を描きだし、かれらの行動様式は受容と抵抗の合成物であった、と論じた。

(6) Oscar Handlin, *The Uprooted: The Epic Story of the Great Migration That Made the American People*, 1951.

(7) アメリカにおける移民史学の展開については、野村達朗「アメリカ移民史学の展開（1） 「新移民史学」以前のヨーロッパ系移民史研究」；「アメリカ移民史学の展開（2） 「新移民史学」の台頭とその諸性格」；「アメリカ移民史学の展開（3） 統合をめぐる今日の論議」愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』16, 31, 2001年, 17, 2002年が詳しい。

(8) 山田史郎は「1970年代になるまで（あるいは、それ以後も）移民の研究は、移民送出国か、移民受容国かのいずれかに焦点を当ててきた。たとえば、米国における移民史研究では、一般的な出移民の背景が論じられることはあっても、考察の主眼は、米国に入国した移民が、ある場合には排斥に直面しながらも、地位の向上とアメリカ社会への参入を模索した適応過程におかれていたといえる。」とアメリカ移民史研究の問題点を指摘している。この指摘は日本の研究にもいえる。「ホワイト・エスニックへの道」山田史郎他『近代ヨーロッパの探求 移民』ミネルヴァ書房, 1998年, p. 16.

(9) Rudolph Vecoli, "Ethnicity and Immigration," Stanley Kutler, ed., *Encyclopedia of the United States in Twentieth Century*, Vol. 1, 1996.

(10) John Bodnar, *The Transplanted: A History of Immigrants in Urban America*, 1985.

3 世紀転換期のヨーロッパ系移民

日本におけるアメリカ史の研究状況を見ると、アメリカの新しい社会史学の「底辺からのアプローチ」の影響を受けて、70年代の後半から「普通の人々」を研究対象とする社会史的研究が増え始めた。そのような中で、アメリカの「新しい労働史」研究の新潮流にいち早く注目し、その研究を日本に積極的に紹介したのが野村達朗であった。野村は南北戦争終結から世紀転換までの時期（1865-1900年）に関し、ウィスコンシン学派の制度学派的枠組みの打破と新しい労働史の研究が提起している問題などを紹介したばかりでなく、野村は自らも次々と新しい移民史・労働史研究の成果を発表した⁽¹¹⁾。そして野村は、日本においては、移民史と労働史は別々に研究されてきたと指摘し、両者の研究の結合の必要を主張し、移民労働者の全体像を捉えることのできる労働民衆史の構築を訴えた。その一つの集大成として1995年、野村は東ヨーロッパでのユダヤ人の状態と、合衆国でのユダヤ系移民一世の労働者の世界を歴史の主体として描き、日本のアメリカ社会史研究の典型となる『ユダヤ移民のニューヨーク 移民の生活と労働の世界』⁽¹²⁾を出版した。

1960年代末の白人の民族的覚醒を背景として誕生したアメリカの「新しい移民史」研究は、日本の研究者にも大きな影響を与えた。ヨーロッパ移民の適応過程の研究として、山田史郎は、世紀転換期におけるイタリア移民の適応過程を詳細に検討し、イタリア移民が伝統的な人的結びつきと自発的な共同団体が果たした役割を明らかにし、また、ラガーディア市長任期中のイースト・ハーレムにおけるイタリア系校長コヴァロの文化多元論に基づく「異文化間教育」が次第に国民統合の機能を重視するようになっていく過程を明らかにし、イタリア移民のカトリック信仰とエスニック・コミュニティとの係わりで論じている⁽¹³⁾。さらに山田は、移民のエスニシティと国民統合とは必ずしも対立的な関係にはないこと、アイルランド移民が公教育を通じて社会的上昇を図り、黒人との間に人種的境界を設定し、「白人」人種として歴史・社会的に構築され、ホワイト・エスニックの道を歩んでいったことを明らかにした⁽¹⁴⁾。田中きく代は、移民ブローカーや渡航費など、アイルランド人移民問題を具体的に吟味し⁽¹⁵⁾、1840年代のマサチューセッツ州で外国人を排除するネイ

(11) 野村達朗「アメリカ労働史研究の新しい潮流」『歴史評論』341, 1978年；「ニュー・レフト史学とその周辺 労働史の場合」『アメリカ史研究』5, 1980年；「労働史と移民史の結合について」『アメリカ史研究』5, 1982年。

(12) 野村『ユダヤ移民のニューヨーク 移民の生活と労働の世界』山川出版社, 1995年。

(13) 山田史郎「イタリア移民のコミュニティ形成 アメリカにおける移民の適応に関する一考察」『文化史学』36, 1981年；「レオナルド・コヴァロと移民の教育 20世紀前半ニューヨーク市のイタリア系コミュニティ」『西洋史学』127, 1982年；「レオナルド・コヴァロと民族の多様性」『同志社アメリカ研究』21, 1986年；「移民とアメリカのカトリック教会 20世紀前半のイタリア系司祭を中心に」『同志社アメリカ研究』22, 1986年。

(14) 山田「20世紀初頭アメリカのカトリックと中等教育」『同志社アメリカ研究』31, 1995年；「ホワイト・エスニックへの道」山田史郎他『近代ヨーロッパの探求 移民』ミネルヴァ書房, 1998年。

(15) 田中きく代「アンテ・ベラム期のアイルランド移民」関西学院大学アメリカ研究会編『アメリカ その夢と現実』啓文社、「マサチューセッツ州19世紀中葉の外国人貧民政策」『アメリカ研究』34, 1989年。その集大成として『南北戦争期の政治文化と移民 エスニシティが語る政党再編成と救済』明石書店, 2000年。

ティヴィズムが台頭し、貧民救済政策に変化を起こした過程を分析し、各地でネイティヴィズムが生まれ、それが社会変革運動としての側面をもつと同時に、その運動の高まりが1850年代の政党の再編成へと繋がっていったことを解明している。つまり、移民問題が旧来のエリート政治家中心の政治史や階級対立の視点のみでは捉えきれない側面があること、大衆参加による「政治文化」をエスニシティという視点を取りいれて明らかにしている。

世紀転換期における大量の外国人の流入は、外国人を移民として受け入れた合衆国における独特の階級、人種、エスニシティ、ジェンダーの問題を惹起した。そればかりでなく、諸民族と文化、異なった信条と生活様式をもち様々な方法で伝統的な文化と慣習を保持した多様な外国人の流入は、アメリカ合衆国独自の新しい国民意識と社会秩序の形成にも大きな影響を与えた。多様な移民グループにおける階級、エスニシティ、そしてジェンダーの絡み合った関係をアメリカ化運動という統合化の視点から捉えようとしたのが松本悠子である。松本は、19世紀末のシカゴにおけるアイルランド系移民労働者の世界を移民史と労働史研究の成果を取りいれ、20世紀初頭のシカゴにおける食肉労働者に焦点をあてて、労働者の階級的組織化の困難性を分裂の視点からではなく、アイルランド系と東欧系移民労働者として黒人の関係を検討し、そして人種、エスニシティ、ジェンダーの差異にもかかわらず、それらの差異を乗り越えて労働者がどのように階級的統合の契機を模索したのかを論じた。そこで、松本は、20世紀前半におけるアメリカ合衆国の労働者の歴史を論ずるにあたって、階級、ジェンダー、エスニシティのどの一面だけを分析しても不十分であり、資本労働の大きな枠組みの中で、三要素が複雑に相互に関わって、移民労働者の歴史はうごいていたのであると重要な主張をしている⁽¹⁶⁾。さらに、社会史は移民史と黒人史、そして都市史を重ね合わせる研究へと進む。鶴月裕典は「アメリカ都市民衆の社会史」と題し、ガットマン、モンゴメリーの新しい労働史研究が労働者の歴史への方向性を打ち出し、その新しい労働史研究から、都市の間の比較、都市での労働者の生活様式や価値観、文化など新しい都市史民衆史へと研究の方向を示したと評価した⁽¹⁷⁾。そのような方向をめざし鶴月は、19世紀中頃のフィラデルフィアの都市暴動を移民、黒人などの労働民衆の意識や行動に斬新な社会史的なアプローチで迫り、19世紀末から20世紀初頭の都市部では階級とエスニシティによる分離が進行し、都心部には移民や黒人の下層労働者階級が集中したのに対し、郊外にアメリカ生まれや旧移民とその血統のホワイトカラー層や熟練度の高い労働貴族層により階級的に均一なコミュニティを形成されたことを明らかにした⁽¹⁸⁾。濱文章は、経済史の視点から1830-40年代の鉄道や運河建設の資金の調達が困難であったことを実証し、それが建設労働に従事したアイルランド系移民労働者の暴動事件と係わっていたことを指摘する⁽¹⁹⁾。

(16) 松本悠子「ペティコートをはいた食肉処理職人達 20世紀初頭のシカゴにおける階級・エスニシティ・ジェンダー」中央大学文学部『紀要』39, 1994年。

(17) 鶴月裕典『アメリカ史研究』6, 1983年。

(18) 鶴月「フィラデルフィア 1844年暴動の歴史的意義」『史苑』立教大学44-2, 1985年、竹田「19世紀フィラデルフィアにおける都市発展の諸局面」『アメリカ研究』28, 1994年。

(19) 濱文章「アメリカ南部の運河経営と移民労働者」『社会経済史学』54-6, 1989年。

竹田有は、都市史と労働史を結合して世紀転換期の労働者世界の実像に迫り、都市周辺部での熟練層による持ち家の所有と都市中心部に留まる半・不熟練層との間に、職種により分断されたメトロポリスが成立し、前者の中産階級意識と文化に対して、後者の移民の労働者階級意識はエスニック文化とマシン政治に支配されたこと、また階級、エスニシティ、人種という亀裂に従って居住地の住み分けが進行し、それらのプロセスが再生産されたため、労働者としての階級的連帯が困難となったことを実証的に論じた⁽²⁰⁾。また、労働者階級の文化について、森脇由美子は、工業化と労働慣習の変容を伴う労働者の自立の問題から迫り、労働者階級による商業文化の領有という観点から劇場の変容を考え、階級・ジェンダー間の権力関係を規定するエリートのための文化装置であった劇場は、1840年代になると主たる観客は労働者階級の歓声に応える俳優や芝居を見せる場へと変容し、現実社会の階級対立の表象となった⁽²¹⁾、と論じる。野村は特定の個別的民族集団ではなく、イタリア系、ポーランド系、アイルランド系、ユダヤ人、黒人などの女性の間における労働参加率を比較し、階級・階層と母文化の差の重要性を指摘し⁽²²⁾、マルチ・エスニックな多元的アプローチをめざしている。

しかしながら、これらの差異を統合する力は強く、合衆国に残ることを決意したヨーロッパ移民の多くが、1920年代には帰化し、アメリカ的な価値観を受け入れていったことも事実である。その主な力となったのがアメリカ化運動の活発な推進であった。この運動は強制的な国民的統合化運動であったといえる。しかし、このような強制的力のみによって、移民たちはアメリカ的な価値観を受け入れていったのではない。ガットマンなどは抵抗の基盤としてエスニック・コミュニティを捉えたが、それを統合への契機として、いわばその両面性において捉える必要があるのではないか。つまり移民のアメリカ的生活への憧れも強かった。20世紀前半、松本は、移民という言葉は労働者と同義であり、アメリカ化運動は移民を近代的労働者にすることを試みた運動でもあったこと⁽²³⁾、また、その運動は現実には移民労働者がアメリカ的生活水準とアメリカ的生活様式を達成するのは容易ではなかったにもかかわらず⁽²⁴⁾、それらが消費の仕方を媒介として「アメリカ化」の基本的

(20) 竹田有「メトロポリスの誕生とアメリカ労働者階級」『史林』74-5, 1991年；「合衆国メトロポリスとエスニシティ、人種、階級」歴史学研究会編『19世紀民衆の世界』青木書店、1993年；「郊外化とアメリカ中産階級」『アメリカ史研究』28, 1994年。

(21) 森脇由美子「娯楽の発達と労働者階級の文化 19世紀中葉ニューヨーク市パワリー街を中心に」『立命館文学』534, 1994年、「劇場の街ニューヨークの誕生」『立命館文学』558, 1998年。

(22) 野村「アメリカにおける女性の労働参加とエスニシティ」『名城法学』42別冊, 1991年。

(23) 松本「アメリカ人であること・アメリカ人になること 20世紀初頭の『アメリカ化』運動におけるジェンダー・階級・人種」『思想』884, 1998年。

(24) 移民が他者化され、貧困問題の象徴とはなったが、労働者階級全体の問題とはならなかったことについては、松本『「他者」としての貧困 革新主義時代における母性主義的福祉政策とアメリカ化運動』中央大学文学部『紀要』42, 1997年を参照。

(25) 世紀転換期からの大衆消費社会を論じ、消費が大衆を捉え、消費文化とアメリカ的価値・アメリカニズムの関係の歴史を明らかにしているのが、常松洋『大衆消費社会の登場』山川出版社、1997年である。秋元英一は、この大量消費の生活様式をアメリカ資本主義の特質として、消費資本主義として捉え、1880-1920年代を生産資本主義から消費資本主義への転換期とみている。『アメリカ経済の歴史 1492-1993』東京大学出版会、1995年。

枠組みとなったことを論じた⁽²⁵⁾。アメリカ化運動とは移民労働者を大量生産と大量消費というアメリカ資本主義の夢に取り込み、「アメリカン・ドリーム」の虜にさせ物質的に豊かな国、消費文明の先進国という「想像の共同体」を構築する一端を担わせることであったことを明らかにしている。

4 在米日本人・日系人移民

日本のアメリカ移民史研究において非ヨーロッパ系移民が研究対象となることは少なかった。その唯一の例外は在米日本人・日系移民研究であった⁽²⁶⁾。日本人がアメリカへ多く移住したのは19世紀の後半から20世紀の初頭に集中した。そして、日本人の研究は、一つは、西部では中国人排斥運動後の日本人に対する排斥運動が強まり、1924年の移民法において「帰化不能外国人」とされ、アメリカ市民となる道が閉ざされた歴史的過程、もう一つは、第二次世界大戦中「敵性外国人」として約12万人の日本人・日系人が強制収容されたという二つの歴史的事実についての研究⁽²⁷⁾を中心に行われてきた。つまり、日本人による研究は在米日本人はアメリカ合衆国市民権を取得することが拒否され、帰化不能外国人として国民の枠外へ置かれ、戦時中には敵性外国人として強制収容されることになった、この二つの事件に集中することとなった。

このような研究状況にあった1991年、在米・日系アメリカ人研究のパイオニアの一人である阪田安雄を中心として日本移民学会が設立された⁽²⁸⁾。阪田は第二回大会の報告「アメリカにおける移民史研究と日本人の“移住”の研究」において、それまでの日本における移民研究が「出移民」研究⁽²⁹⁾が主である一方、アメリカでの研究は「移住国に上陸してからの在米日本人史」の研究が多いことを指摘し、両者の研究の結合が必要であることを強調した。さらにこれまでの「日系人」研究では、排斥運動、強制収容と補償問題、日米関係などとの関係で語られることが多く、日本人独自の研究が少ないことを批判した。

後に出移民研究については、石川友紀が日本からの移民母村関連文献目録（1986～1997年）を作成し、「結論としては、移民送出側からの移民の研究は、歴史的な研究段階に入った」⁽³⁰⁾と評価していた。1992年、アメリカにおける在米日本人・日系移民史研究を大きく前進させたウウジ・イチオ

(26) その詳細は桑井輝子・飯野正子「日本における日本人移民・日系アメリカ人研究」『東京大学アメリカ研究資料センター』13, 1990年参照。

(27) その詳細は、移民研究会編『日本の移民研究 動向と目録』日外アソシエーツ, 1994年; 阪田安雄「移民研究の歴史的考察とその課題」, 『日系移民資料集』北米編第18巻, 解題・解説, 日本図書センター, 1994年を参照。

(28) 日本移民学会設立の経緯については、佐々木敏二「日本移民学会3年間の歩み」『移民研究年報』創刊号, 1995年参照。

(29) 出移民についての詳細な研究成果については、前掲、移民研究会編『日本の移民研究 動向と目録』を参照。

(30) 石川友紀「移民研究の現状と課題 移民送出側の視点から」『移民研究年報』5号1998年が日本からの移民母村関連文献目録（1986～1997年）を作成している。

力の画期的著作『一世』⁽³¹⁾が翻訳された。イチオカは、従来の日本人移民史研究は排斥する側の歴史に焦点が当てられ、排斥される側からの研究が少ないと充来の研究方法を批判した。イチオカは当時の在米日本人会、日本語新聞、書簡、そして日本の外交資料などの第一次資料分析に基づいて、在米日本人は帝国主義の時代における日米両国家による政策に翻弄され、「帰化不能外国人」と規定され激しい差別に耐えた。このようにイチオカにより、かれらは単なる犠牲者ではなく、主体的に未来を切り開こうと厳しい労働と生活を生きた「一世の世界」として生き生きと描き出され、日本の研究者の研究方法来に大きな影響を与えた。また、ハワイの移民社会における白人農場主のもとで働く日本人、フィリピン人などの多様な民族的背景をもつ労働者の労働と生活を扱ったのがロナルド・タカキの『パウ・ハナ ハワイ移民の社会史』⁽³²⁾である。

1930年代の「未踏の時代」⁽³³⁾における在米日本人コミュニティを取り上げた数少ない研究が二つある。一つは、東栄一郎「1930年代の在米日本人移民コミュニティとフィリピン人移民 カリフォルニア州ストックトン地方における異民族関係」である。東は、第二次世界大戦期における在米日本人移民とフィリピン人移民のアジア系移民間の対立事件を取り上げ、その事件の原因が国際的な国家間の対立、また移民間の民族的偏見や文化的差異だけではなく、白人の支配する社会的環境のなかで、白人地主などに煽り立てられた「民族間の生存競争」など戦前から続いてきた対立などにより創出された「社会的構築物」であるという解釈を与えている。これは移民がナショナルな国家を前提とする枠組の中で階級と人種、民族という絡み合う具体的な事例として見事に解された論文である。さらに松本は、非ヨーロッパ系として、1936年ロサンゼルス・セロリ・ストライキと日系農業コミュニティを取り上げ、彼らの意識にまで踏み込んで、白人農民、メキシコ人労働者との関係など人種と階級関係を分析し、ついには民族的色彩の強い「大和魂」を持ち出して、それがアメリカ化に必要であると説かれたことなど、「帰化不能外国人」とレッテルを貼られた日本人移民がいかにしてアメリカ人としての国民意識を構築していったのかを検討している⁽³⁴⁾。

5 メキシコ系アメリカ人

アメリカ合衆国のメキシコ系アメリカ人についての歴史研究は、1948年にケアリー・マックウイリアムス⁽³⁵⁾の『メキシコから北へ向かって』⁽³⁶⁾が発刊されるまで、神話的叙述でしかなく、メキ

(31) Yuji Ichioka, *The Issei of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*, 1988, 邦訳 富田虎男監訳『一世』刀水書房, 1992年。

(32) Ronald Takaki, *Pan Hana: Plantation Life and Labon in Hawaii 1835-1920*, 198 富田虎男他訳『パウ・ハナ ハワイ移民の社会史』刀水書房, 1986年。

(33) 阪田安雄は、なぜ未踏の時代なのかについて詳細に説明している。「戦後50年と日系アメリカ人史研究 語られない1930年代」『移民研究年報』創刊号, 1995年。

(34) 松本悠子「1936年ロサンゼルス・セロリ・ストライキと日系農業コミュニティ」『史林』75-4, 1992年。

(35) ケアリー・マックウイリアムスについては、大塚秀之がいち早く日本に紹介している。『アメリカ合衆国史と人種差別』の第7章参照。また、詳しくは、「ケアリー・マックウイリアムスとアメリカ合衆国の人種差別」『一橋論叢』88-1, 1987年。

シコ人労働者階級の19世紀のルーツと体験について歴史・具体的に研究されたものは皆無であった。チカノ運動の理論的指導者の一人であったホアン・ゴメス・キニョーネスは、1972年の論文「最初の一步」において、チカノ労働者階級の歴史を戦闘的労働組合主義とストライキへの参加として概念化しようと試みた。彼は、19世紀を資本家の搾取、白人労働者の差別と敵対行動に抵抗・反撃した時代として捉え、それらの闘いを南西部の資本主義的利害に抗する階級的・道徳的闘いと捉えた⁽³⁷⁾。このゴメスの先駆的研究はメキシコ系の研究者に多大な影響を与え、それ以降の10年間チカノ歴史研究に指針を与えた。だが、1970年代に新しいアメリカ社会史の教育を受けた若手歴史研究者は、60年代後半から70年代初期にかけての歴史研究は、19世紀チカノの歴史的理解を高めたが、メキシコ人労働者の真の歴史具体的な姿を明らかにしてはしていない、と批判し、チカノ労働者階級に関する社会的な研究を行った。1970年代後半に入ると、19世紀のメキシコ人労働者に関する最初の社会史的な歴史研究が論文・専門誌の形で表れ、それらは従来の解釈とは異なるものが多かった。例えば、その代表的な研究として、R.カスティージョは、米墨戦争以前と19世紀後半のロサンゼルスにおける職業構成を考察し、この期間メキシコ人の職業構成には実質的な変化がなかったことを示し、その原因は、メキシコ人がアングロ支配のもとでのロサンゼルスの発展過程から事実上排除されてきたためである、と主張した。この解釈は、充来メキシコ人はアメリカへの併合による急激な社会構造の転換によって著しい変換を余儀なくされたと主張した従来のR.アクーナ⁽³⁸⁾やC.マックウィリアムスの研究とは大きく異なる解釈であった。また、A.カマリージョは、旧来の研究を批判的に検討し、19世紀後半期、南カリフォルニアの都市におけるメキシコ人の社会史を実証的に研究して、併合後メキシコ人は、職業階段を下降移動し、職の強制的転換を強制され、職業構成の最底辺へ押し下げられたことを明らかにした。この原因として、メキシコ人に対する社会的な居住隔離と差別、政治的従属、土地の収奪とプロレタリア化をあげている⁽³⁹⁾。旧来の研究を体系的に批判し、メキシコ系の社会史研究の本格化を告げたのがマリオ・ガルシアの研究であった。ガルシアは、新しい社会史の視点から、メキシコ系アメリカ人労働者階級の形成に関する新しい理解を示した。ガルシアは、20世紀初頭におけるメキシコ人の職業構成の分析から始め、メキシコからの移民が合衆国において賃金労働者化していく過程は、不熟練職へ不均衡に集中し、その雇用機会は限定され、同一労働にもかかわらず賃金の格差が存在し、不平等な状態に置かれていた。そのようなメキシコ人労働者の状態を具体的に明らかにした上で、メキシコ人の労働者はストライキに参加するものもいたが、メキシコ人のストライキは例外的行動であり、彼ら自身は労働者階級の一員として行動していたのではなく、むしろメキシコ人としての人種・民族のラインに沿って労働者を組織し、敵の攻撃に対して防衛したにすぎない、と主張した。このようにガルシアはメキシコ人

(36) Carey McWilliams, *North From Mexico: The Spanish-Speaking People of the United States*, 1948.

(37) Juan Gomez-Qüineones, "The First Steps: Chicano Labor Conflict and Organizing, 1900-1920", *Aztlan*, 1, 1972.

(38) Rodolfo Acuña, *Occupied America: The Chicano's Struggle toward Liberation*, 1972.

(39) Albert Camarillo, *Chicanos in a Changing Society: From Mexican Pueblos to American Barrio in Santa Barbara, 1848-1930*, 1979. Richard Griswold del Castillo, *The Los Angeles Barrio, 1850-1890: A Social History*, 1980.

移民の民族的性格を強調し、この点では、メキシコ人移民も、他の地域からの移民と本質的に異なることはなかった、と論じた。さらに、ガルシアはメキシコ人のストライキへの参加は賃金と労働条件の改善という経済的な要求に動機付けられたものであり、その行動は社会に抗するというよりむしろ、アメリカ社会へ統合・同化したいという願望からでていた、と当時のメキシコ人移民の性格を規定した⁽⁴⁰⁾。

第二次大戦後の移民供給国でメキシコは第一位を占めるにもかかわらず、日本におけるメキシコからの移民史研究は少ない。日本におけるメキシコ系アメリカ人についての歴史研究は、まだ、研究史の整理という段階には達していない⁽⁴¹⁾。チカノ問題の重要性を指摘したのは大塚秀之である。大塚は人種差別を黒人問題だけに集中することの問題点、人種差別を世界史的関連で見ることの必要性を述べた後、アメリカの人種差別の「国内植民地」論的把握とそれを独占資本主義の構造の不可欠の部分として捉える認識を示している。⁽⁴²⁾チカノ問題の起源は、アメリカ合衆国のメキシコ領土の武力的併合に始まり、併合された今日の合衆国南西部に居住していたメキシコ人にはアメリカ市民権が付与され、彼らはスペイン入植者の子孫として、人口統計上、人種的には「白人」に含まれた。しかしその後の合衆国のメキシコに対する政治的・経済的支配はメキシコからの大量の合衆国南西部への合法・非合法の流入の原因を作った。マリオ・バレラはこのような南西部を「一種の国内植民地」⁽⁴³⁾と規定した。

第二次世界大戦中に開始されたメキシコからの契約労働者導入計画、通称ブラセロ計画⁽⁴⁴⁾は戦後のメキシコからの大量の労働力移動の契機となった。かれらはいくまでも移民ではなく、「外国人労働者」として導入されたところに特徴があった。1980年代庄司啓一は、ブラセロ計画が主としてカリフォルニア州の農場主団体の要求により戦後も継続され、導入されたブラセロは野菜や果物などを中心として農業労働市場の支配的な労働力となったこと、しかもブラセロとともに、多数の不法メキシコ人が合法的なブラセロと一緒に働き、農場主は莫大な利潤を獲得したことを明らかにした。ブラセロ計画は廃止される64年までにほぼ500万人近いメキシコ人を導入し、後のメキシコ人移民の急増の主要な要因をなした。ブラセロ計画が廃止された1965年、カリフォルニアの農村ではメキシコ系とフィリピン系の農業労働者のストライキが開始され、その運動には広範な人々が参加し、ユニークな社会運動を展開した。90年に入ると、アメリカの社会史・移民史研究の成果を吸収したチカノ研究が始まる。中川正紀のカリフォルニア州におけるメキシコ系農業労働者に関する

(40) Mario Garcia, *Desert Immigrants: The Mexicans of El Paso, 1880-1920*, 1981.

(41) チカノ史学史的整理は、Antonio Rios-Bustamante, *A General Survey of Chicano/a Historiography*, ed., R. Rochin and D. Valdes, *Voice of A New Chicana/o History*, 2000.

(42) 大塚秀之『アメリカ合衆国史と人種差別』大月書店、1982年、pp.173-175。本書はアメリカ帝国批判の視角と分析アプローチが提示されている。

(43) Mario Barrera, *Race and Class in the Southwest: A Theory of Racial Inequality*, 1979.

(44) 庄司啓一「ブラセロ計画についての一考察」『城西経済学会誌』19-1, 1983年；「チカノ労働者階級の状態についての一考察」札幌学院大学『紀要』36, 1984年；「メキシコ人移民の給源についての一考察」『城西経済学会誌』1985年；「ブラセロ計画とカリフォルニア農業」『立教経済学研究』44-2, 1990年。

る一連の研究⁽⁴⁵⁾は、その運動が単純に経済的な要求ばかりでなく、社会的公平、労働者・人間としての尊厳を求め、ストライキやボイコット運動を通じて、メキシコ系とフィリピン系の異なった民族集団の団結、労働界、宗教界、学生、コミュニティなど広く社会に訴えた新しい社会運動の要素を持っていたことを明らかにしている。これは、移民史、労働史、農村史、宗教史など社会史研究の総合的な力を感じさせる。

1960年代、メキシコ系は黒人の公民権運動に刺激されて独自のチカノ公民権運動を展開した⁽⁴⁶⁾。しかし70年代以降の「非合法移民」排斥する運動の高まりを、新たなネイティヴィズムの台頭であると警告を発するのが、メキシコ系歴史研究者のジョージ・サンチェスである。日本においては、村田勝幸がこのサンチェスの主張をうけて、非合法移民に恩赦を与えた移民法の審議過程、移民擁護団体の運動を検討し⁽⁴⁷⁾、メキシコ人の流入問題を「不法合法」移民と規定し、国家・人種・エスニシティの新たな「境界」を作り出していく過程として捉え、国民国家パラダイムを再検討する視点から非合法移民問題の本質に迫ろうとしている。

6 おわりに

グローバリゼーションが世界的な標語ともなりつつある今日、「移民の国」アメリカ合衆国は、大量の移民を受け入れる一方、他方では国家による移民規制と国民の移民排斥運動が高まっている。しかも、19世紀末から20世紀前半の移民排斥運動の対象が南東ヨーロッパからの新移民と呼ばれた「白人」中心であったのに対して、ほぼ一世紀後の現在は、その排斥対象は、ラテンアメリカとアジア諸国からの「有色」移民に対する排斥運動である。今日の移民問題とは、サンチェスの主張するように、ラテンアメリカ系とアジア系移民に対する新しいネイティヴィズムであるのか。この主張は、白人による人種差別だけではなく、黒人に対しての批判を含んでいるために、研究者に人種概念の再検討を迫っている。アメリカ合衆国における移民問題研究は、国民国家の枠組を前提とするパラダイムを相対化する新しい研究視角が求められている。グローバリゼーションの中でも、移民問題は、アメリカ社会の基本に関わる問題である点は今日でも変わっていない。

（しょうじ・けいいち 城西大学経済学部助教授）

(45) 中川正紀「ディレーノ・ストライキとチカーノのアイデンティティ」『アメリカ研究』26, 1992年；「メキシコ系とフィリピン系の農業労働者ストライキにおける聖職者 プロテスタントによる早期支援のルーツをめぐって」『アメリカ史研究』16, 1993年；「1960年代のカリフォルニア州における農業労働者ストライキとカトリック教会」『一橋論叢』112-2, 1994年；「デラノ・ストライキをめぐる『多人種・多民族の共存』の問題 異民族から成る組合どうしの『合併』の時期を中心として」札幌学院大学人文学会『紀要』58, 1995年；札幌学院大・人文学会「カリフォルニアにおける農業労働運動史」『紀要』62, 1998年。

(46) チカノ公民権運動、解放運動については、庄司啓一「米国におけるヒスパニックの世界」南北アメリカの500年、第5巻 歴史学研究会編『統合と自立』青木書店、1993年を参照。

(47) 村田勝幸「1970/80年代のロサンゼルス衣服産業の構造と非合法労働者の役割 『スウェットショップ』をめぐる議論をてがかりに」『移民研究年報』3, 1997年；「1986年移民法（IRCA）審議過程における『非合法移民』の形成と展開」『アメリカ研究』32, 1998年、「コミュニティとイデオロギーの狭間で 非合法移民擁護のためのメヒカノ組織CASAの挑戦と挫折」『アメリカ史研究』23, 2000年。

【主要参考文献】

1. 野村達朗「アメリカ労働史研究の新しい潮流」『歴史評論』341, 1978年。
2. 野村達朗「ニュー・レフト史学とその周辺 労働史の場合」『アメリカ史研究』5, 1980年。
3. 山田史郎「イタリア移民のコミュニティ形成 アメリカにおける移民の適応に関する一考察」『文化史学』36, 1981年。
4. 山田史郎「レオナルド・コヴァロと移民の教育 20世紀前半ニューヨーク市のイタリア系コミュニティ」『西洋史学』127, 1982年。
5. 野村達朗「労働史と移民史の結合について」『アメリカ史研究』5, 1982年。
6. 大塚秀之『アメリカ合衆国史と人種差別』大月書店, 1982年。
7. 庄司啓一「ブラセロ計画についての一考察」『城西経済学会誌』19-1, 1983年。
8. 庄司啓一「チカノ労働者階級の状態についての一考察」札幌学院大学人文学会『紀要』36, 1984年。
9. 庄司啓一「メキシコ人移民の給源についての一考察」『城西経済学会誌』21, 2・3, 1985年。
10. 鶴月裕典「フィラデルフィア 1844年暴動の歴史的意義」立教大学『史苑』44-2, 1985年。
11. ロナルド・タカキ 富田虎男他訳『パウ・ハナ ハワイ移民の社会史』刀水書房, 1986年。
12. 濱文章「アメリカ南部の運河経営と移民労働者」『社会経済史学』54-6, 1989年。
13. 田中きく代「マサチューセッツ州19世紀中葉の外国人貧民政策」『アメリカ研究』34, 1989年。
14. 油井大三郎「19世紀後半のサンフランシスコ社会と中国人排斥運動」油井他編『世紀転換期の世界』未来社, 1989年。
15. 桑井輝子・飯野正子「日本における日本人移民・日系アメリカ人研究」『東京大学アメリカ研究資料センター』13, 1990年。
16. 野村達朗「アメリカにおける女性の労働参加とエスニシティ」『名城法学』42別冊, 1991年。
17. 竹田有「メトロポリスの誕生とアメリカ労働者階級」『史林』74-5, 1991年。
18. ユウジ・イチオカ 富田虎男監訳『一世』刀水書房, 1992年。
19. 松本悠子「1936年ロサンゼルス・セロリ・ストライキと日系農業コミュニティ」『史林』75-4, 1992年。
20. 中川正紀「ディレーノ・ストライキとチカーノのアイデンティティ」『アメリカ研究』26, 1992年。
21. 中川正紀「メキシコ系とフィリピン系の農業労働者ストライキにおける聖職者 プロテスタントによる早期支援のルーツをめぐって」『アメリカ史研究』16, 1993年。
22. 庄司啓一「米国におけるヒスパニックの世界」南北アメリカの500年, 第5巻 歴史学研究会編『統合と自立』青木書店, 1993年。
23. 竹田有「合衆国メトロポリスとエスニシティ, 人種, 階級」南北アメリカの500年, 第3巻 歴史学研究会編『19世紀民衆の世界』青木書店, 1993年。
24. 竹田有「郊外化とアメリカ中産階級」『アメリカ史研究』28, 1994年。
25. 竹田有「19世紀フィラデルフィアにおける都市発展の諸局面」『アメリカ研究』28, 1994年。
26. 中川正紀「1960年代のカリフォルニア州における農業労働者ストライキとカトリック教会」『一橋論叢』112-2, 1994年。
27. 松本悠子「ペティコートをはいた食肉処理職人達 20世紀初頭のシカゴにおける階級・エスニシティ・ジェンダー」中央大学文学部『紀要』39, 1994年。
28. 移民研究会編『日本の移民研究 動向と目録』日外アソシエーツ, 1994年。
29. 阪田安雄「移民研究の歴史的考察とその課題」『日系移民資料集』北米編第18巻, 解題・解説, 日本図書センター, 1994年。
30. ジョン・ハイアム, 斎藤真ほか訳『自由の女神のもとへ』平凡社, 1994年。
31. 森脇由美子「娯楽の発達と労働者階級の文化 19世紀中葉ニューヨーク市パワリー街を中心に」『立命

- 館文学』534号，1994年。
32. 中川正紀「デラノ・ストライキをめぐる『多人種・多民族の共存』の問題 異民族から成る組合どうしの『合併』の時期を中心として」札幌学院大学人文学会『紀要』58, 1995年。
 33. 庄司啓一「リストラクチャリングとヒスパニック」有賀貞編『エスニック状況の現在』日本国際問題研究所，1995年。
 34. 阪田安雄「戦後50年と日系アメリカ人史研究 語られない1930年代」『移民研究年報』創刊号，1995年。
 35. 佐々木敏二「日本移民学会3年間の歩み」『移民研究年報』創刊号，1995年。
 36. 秋元英一『アメリカ経済の歴史 1492-1993』東京大学出版会，1995年。
 37. 野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク 移民の生活と労働の世界』山川出版社，1995年。
 38. 貴堂嘉之「帰化不能外国人の創造 1882年排華移民法制定過程」『アメリカ研究』29, 1995年。
 39. 常松洋『大衆消費社会の登場』山川出版社，1997年。
 40. 松本悠子「『他者』としての貧困 革新主義時代における母性主義的福祉政策とアメリカ化運動」中央大学文学部『紀要』42, 1997年。
 41. ジョン・ボドナー著，野村達朗他訳『鎮魂と祝祭のアメリカ 歴史の記憶と愛国主義』青木書店，1997年。
 42. 村田勝幸「1970/80年代のロサンゼルス衣服産業の構造と非合法労働者の役割 『スウェットショップ』をめぐる議論をてがかりに」『移民研究年報』3, 1997年。
 43. 村田勝幸「1986年移民法（IRCA）審議過程における『非合法移民』の形成と展開」『アメリカ研究』32, 1998年。
 44. 松本悠子「アメリカ人であること・アメリカ人にすること 20世紀初頭の『アメリカ化』運動におけるジェンダー・階級・人種」『思想』884, 1998年。
 45. 山田史郎「ホワイト・エスニックへの道」山田史郎他『近代ヨーロッパの探求 移民』ミネルヴァ書房，1998年。
 46. 森脇由美子「劇場の街ニューヨークの誕生」『立命館文学』558, 1998年。
 47. 村田勝幸「コミュニティとイデオロギーの狭間で 非合法移民擁護のためのメヒカノ組織CASAの挑戦と挫折」『アメリカ史研究』23, 2000年。
 48. 田中きく代『南北戦争期の政治文化と移民 エスニシティが語る政党再編成と救済』明石書店，2000年。
 49. 野村達朗「アメリカ移民史学の展開（1） 「新移民史学」以前のヨーロッパ系移民史研究」愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』16，2001年。
 50. 野村達朗「アメリカ移民史学の展開（2） 「新移民史学」の台頭とその諸性格」愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』17，2001年。
 51. 野村達朗「アメリカ移民史学の展開（3） 統合をめぐる今日の論議」愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』31，2002年。
 52. 古矢旬『アメリカニズム』『普遍国家』のナショナリズム 東京大学出版会，2002年。
 53. 松本悠子「内在する『他者』と『国民化』 20世紀前半のロスアンゼルスにおける日本人移民の『米化』」中央大学文学部『紀要』45，2000年。

Bibliography

1. Carey McWilliams, *North From Mexico: The Spanish-Speaking People of the United States*, 1948.
2. Oscar Handlin, *The Uprooted: The Epic Story of the Great Migration That Made the American People*,

- 1951.
- 3 . Juan Gomez-Qüineones, " The First Steps: Chicano Labor Conflict and organizing, 1900-1920 ." *Aztlan*, Vol. 3, No. 1, 1972.
 - 4 . Rodolfo Aćuna, *Occupied America: The Chicano 5 Struggle toward Liberation*, 1972.
 - 5 . John Higham, *Send These to Me: Immigrants in Urban America*, 1975.
 - 6 . Albert Camarillo, *Chicanos in a Changing Society: From Mexican Pueblos to American Barrio in Santa Barbara*, 1848-1930, 1979.
 - 7 . Mario Barrera, *Race and Class in the Southwest: A Theory of Racial Inequality*, 1979.
 - 8 . Mario Garcia, *Desert Immigrants: The Mexicans of El Paso, 1880-1920*, 1981.
 - 9 . John Bodner, *The Transplanted: A History of Lmminrants in hrban America*, 1985.
 - 10 . Yuji Ichioka, *The Issei of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924*, 1988.
 - 11 . John Bodnar, *Remaking America: Public Memory, Commemoration and Patriotism in the Twentieth Century*, 1992.
 - 12 . Rudolph Vecoli, " Ethnicity and Immigration, " Stanley Kutler, ed., *Encyclopedia of the United States in Twentieth Century*, Vol. 1, 1996.
 - 13 . George Sanchez, " Face the Nation: Race, Immigration, and the Rise of Nativism in Late Twentieth Century America " *International Migration Review*, 31-4, 1997.
 - 14 . Antonio Rios-Bustamante, A General Survey of Chicano/a Historiography, ed., R. Rochin and D. Valdes, *Voice of A New Chicana/o History*, 2000.

【これだけは知っておきたい労働法シリーズ】 各定価(本体1600円+税)旬報社刊

退職・解雇のルール ◎古川景一

雇用を守り、解雇を規制するにはどうすればよいか。

介護福祉職・働き方のルール ◎水谷英夫

介護サービスの契約関係から労働条件、介護事故まで介護労働をめぐるQ&A。

労働組合活用のルール ◎道幸哲也

労働組合の結成から日常活動、労働委員会の活用まで。

企業再編・会社分割と雇用のルール ◎徳住堅治

会社分割、アウトソーシング、合併、持株会社など企業再編リストラへの対し方。

中高年・管理職 働き方のルール ◎山内一浩

中高年・管理職も労働者。権利と生活を守るための法律知識。

セクシュアル・ハラスメントと男女雇用平等 ◎山田省三

「セクハラ」問題から、ポジティブ・アクションまで働きやすい職場づくりQ&A。

